

研修報告書 No14

東京大学医学部附属病院 研修医
研修施設：梶原町立国保梶原病院
津野町国保杉ノ川診療所

2012年2月、私は地域研修先として高知県梶原市の梶原病院にお世話になった。雲の上の町、梶原は愛媛県と高知県の境に位置し、私が到着した時は雪が吹雪いており驚いた。山に囲まれた梶原の空気は澄んでいて、夜に無数の星が輝くととても素敵な町だった。

私が研修した梶原病院は、内科、小児科、整形外科、眼科外来があり、内科の入院病床も30ほど有している。一ヶ月と短い研修ではあったが、病棟はもちろんのこと、外来も担当させていただき、訪問診療、特別養護老人施設、診療所など様々な現場にも同行させていただいた。入院は骨折や肺炎といった病気が多い中、神経疾患初発の方がおり、いつも働いている大学病院ではすぐMRIをとってしまうところが、梶原病院にはMRIがないため理学所見から疾患を煮詰めていくという、内科診断の醍醐味を経験することもできた。また、梶原病院に来て感じたことは、職種間の垣根の低さ、それゆえのフットワークの軽さである。中でも一番驚いたのはケアプラン会だ。これは医師、保健師、ケアマネージャー、理学療法士、看護師が一同に会し、それぞれの立場から地域住民の方々（入院中、自宅や施設に退院した方、入院はしていないが介護サービスの導入が必要そうな方など）の情報を提供し合い、介入できるサービスなどがあれば積極的に提示していくものである。例えば入院している患者さんが退院後、自宅に戻る場合どのように生活するか、その上で具体的に困る部分は何か、提供できる医療、保健、介護のサービスはないか検討し、積極的に本人、家族に提示していくという大変画期的な会であった。ここでは職種間の壁は全くなく、皆一丸となって住民の方が梶原でどのように暮らしていくかを考えていた。病院には地域支援センターが隣接し、このフットワークの軽さを実現可能なものにしており、まさに地域包括ケアの現場をみることができた。

私は今回の地域研修を通して、医師の仕事とは何か考えさせられた。もちろん患者さんの病気を治療することが一番基本的な仕事であり求められていることである。しかし、例えば患者さんが病院から帰った後、どうやって住み慣れた町で暮らし続けるか、本人のADLや家族構成、住居など様々な要素を考慮しながらみんなで協力してサポートしていく、これも大事な医師の役割の一つなのだと感じた。私が今まで考えていた医師の仕事は一部のものであり、今回の臨床研修で視野を広げることができた。もちろん梶原町の規模は大きなものでなく、それゆえフットワークが軽い部分もあるが、東京など大きな都市でもケアプラン会など取り入れられる部分は多大にあるのではないかと感じた。

とにかく梶原病院のスタッフの方々には温かい。皆自分の仕事に境界線をひくことなく、どうすれば目の前の患者さんが望む暮らし方ができるかを一緒に悩んでいた。内田院長始め梶原病院の医師の方々の熱い地域医療への思いに触れ、本当に充実した研修生活を送ることができた。私は今回四国を初めて訪れたが、高知県も他の地方県と同じで、やはり医師確保が重要な課題だと伺った。医師不足の背景には県全体の人口低下があると思うが、人、医師が集まるように

するには住みやすい町づくりが大事だ。高知県梶原町では住民の皆さんが本当にやさしく、県外から来た私をお宅へ招いていただき、郷土料理の皿鉢料理をごちそうになったりと大変お世話になった。どこに行っても「こんな寒いところによう来ちよったのう」と温かい言葉で迎え入れてくれた。そんな住民の方々の温かさが地域の最大の魅力だと思う。今回の研修を通して、住民の生活に関わっていく地域に根差した医療を提供できるよう、より一層研鑽を積んでいきたいと思いを新たにすることができた。